

日本放送協会岡山放送局長賞

当たり前は変わる

岡山県立岡山操山中学校

二年生 芦田 一（むぎ）

「じゃあね、また明日。」

この言葉が言える今がどれだけ幸せなことか、この半年間で実感した。

新型コロナウイルスが私たちに与えた影響ははかり知れない。当たり前だった何もかもが、あっけなく奪われてしまった。外出時はマスクをつけなければならぬし、人混みを避けなければならぬ。多くの「ダメ」が私たちを縛りつけた。なかでも、私たちに大きな影響を与えたのは、全国一斉休校だった。

二月二十七日、私の学年はインフルエンザの流行により、学年閉鎖になっていた。ようやく来週からは学校に行ける、とワクワクしていた。その日の夕方のニュースで、突如その発表を

知った。初めは、何を言っているのか理解できなかった。だんだんと事態を理解し、色々な想いが頭の中を駆け巡った。「あと少してこのクラスも終わるといふのに?」「まだ球技大会も終わっとらんのに?」と。しなければならぬ多くのことに追われていた忙しい毎日が、突然断ち切られ、ぽっかりと穴が空いたような気持ちだった。こんなにも自由にゆっくりと過ごすことが今までなく、少し戸惑った。

四月七日、ようやく長い休校期間が明けた。久々の学校は新たな学年、クラスになってスタートした。久しぶりの友達や先生、教室を見ると、何だかほっとした。やっと、いつもの日常が戻ってきたと思った。しかし、そうはいかなかった。今まで席を班の形にして食べていた弁当の時間もなくなり、全員前を向いて黙って食べなければならなくなった。授業でも、ペアや班での活動はなく、部活動もできず、五十分間の授業も短縮された。それでも、学校がある生活がとても楽しかった。

しかし、四月二十日、再び学校が休校になった。今回の休校は前回よりも期間が長く、家庭学習の時間がさらに増えた。毎日学校からパソコンに送られてくるプリントデータや動画解説を使い、勉強する日々が続いた。二年生になり、新しく習うこ

とが多くあるが、それも一人で勉強しなければならなくなった。分からない問題があっても、一緒に考える友達や教えてくれる先生はそばにいない。不安が募り、孤独感と焦りを感じていた。学校がある生活では気づくことのできなかつた学校の存在の大きさを感じた。一人で勉強することで、自分で諦めず考える力は身につく。けれど、学校は自分の考えだけではなく、友達の発表を聴いたり、また自分の考えを伝えたり質問したりできる。休校になったとき、

「なんで学校休みなん？、早く学校行きたい。」

と毎日のように嘆いていた。けれど、日が経つにつれてだんだんと休校の生活を樂しめるようになった。まとまった長い時間があるからこそ、普段は忙しくてできない、読書や映画の鑑賞、家族と遊ぶことなどを樂しんだ。

そして、六月一日、学校が再開された。やはり今までと同じ生活には戻ってはいない。それでも、徐々に戻りつつある日々が幸せた。換気や消毒を行いながら、私の所属する吹奏楽部もようやく練習をすることができている。今年の文化祭、体育祭は例年よりも規模が縮小されて行われた。学校全体の雰囲気も初めは、どこか盛り上がり欠けているようだった。どうすれ

ば例年に負けない、楽しいものに出来るのか。それは、私たち次第なのだ。去年よりも出来ることが少ないし、と諦めてしまえば、それまでなのだ。私たちは、校内装飾を作り、校内を彩ったり、臨時企画を開催したり、今までの当たり前にとらわれず、今できること、今だからこそできることに挑戦した。すると、例年と形はちがえど、新たな楽しさを生むことができた。そんなとき、ある言葉をふと思い出した。それは、「為せば成る為さねば成らぬ何事も成らぬは人の為さぬなりけり」だ。この言葉は四月に配られた学級通信に載せられていた言葉だ。意味は「できそうもないどんなことであっても、強い意志を持ってやり通せば必ず実現できる。結果が得られないのは成し遂げようと思っただけで行動しないからだ。」とある。この休校期間を通じてこの言葉の意味を実感した。学校に行けない、遊びに行けない、友達に会えない、色々な「できない」を抱えた日々で、コロナのせいだ、とどこか言い訳している自分がいた。できない理由を見つけ、逃げるのはとても簡単なことなのだ。どうすればできるのか考え、行動することが大切だと気づいた。私は休校になったとき、仕方ない、とすぐに前を向けるほど強くはなかった。誰であっても、突然に当たり前がなくなれば、

すぐに前向きにはなれないだろう。日常が恋しくて、行き場のない怒りや不安、憤りを感じる。当たり前と思っていたことは突然そうではなくなることもあるのだ。けれど、その自分のなかの当たり前が奪われたとき、変わったとき、どう行動できるかが大切だと思う。変化に向き合い、受け入れ、できないことが何かだけを考えるのではなく、何ができるかを考える。そんな風に、「変わる」ことを受け入れ、それを楽しむことのできる柔軟な心を持つ。

しかし、「変えてはいけない」こともある。それは、人を想う温かい心。誰がいつどこで感染するか分からないなか、「感染者が誹謗中傷受ける」というニュースを耳にした。無事治ったとき、温かく迎えることのできる優しさはどんな状況であっても守りぬかなければならない。

明日がある保証なんてどこにもない。けれど、その明日がやって来たときに後悔しない昨日にするために、今日という日を大切にしたい。

「じゃあね、また明日。」

そう笑って今日も明日の平和を願う。